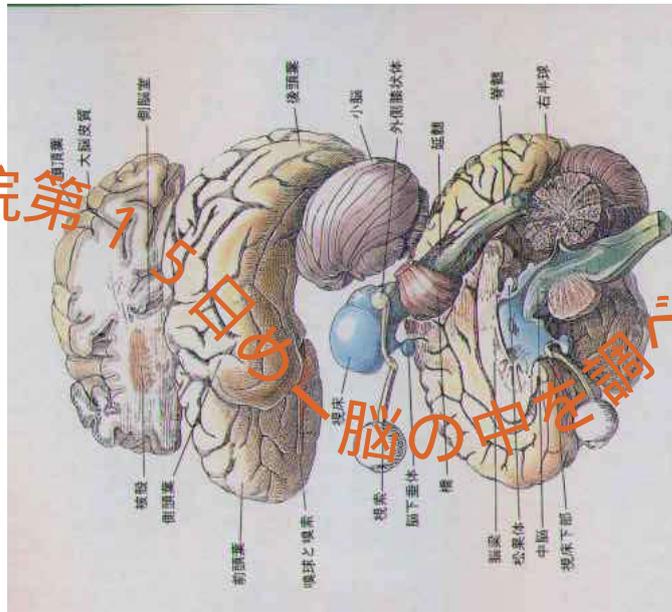


入院第7



島岡さん、脳の中を覗く

10

ぼくは肝臓機能が回復し、トロンボ数値だけが思ったようには下がらないが、すっかり点滴から開放された。午前十時頃、後山ナースがぼくに関する膨大なデータを抱えて病室にやってきた。今日は頭のCTスキャンと肺のX線とお腹と心臓のエコーがある。それで非常に忙しい。特に頭の検査は退院直前の第20日目にも、MRI（磁気共鳴断層撮影 これは一時期医者の間で非常に流行ったことがある）で行う予定になっている。心臓の検査は、あきらめているから差ほど気にならないが、脳ということになると学者として致命的な病巣が発見されはしないか、などと不安になる。とりわけぼくの母は脳下垂体付近の腫瘍で死んだようなものだからだ。

後山ナースが抱えている膨大な資料も気になる。以前本院系列の別の脳神経科でMRIの検査を受けたことがあるだけに、そのデータも含まれているのかなどと気になる。要するに、ぼくが頭が重いとか、痛いとか、全身けだるいなどという不定愁訴を繰り返すので、頭の中を器械的に診てしまえということになった。後山ナースが美しい笑顔で、「島岡さん。ご一緒に頭のCTスキャンにまいりましょう？」という。ぼくは左手は完全にフリーハンドになっているので、「えっ？ご一緒にいっていただけるのですか？」「はい、たくさんデータがあるものですから」ぼくは彼女が重そうに抱えている物を見てうなずいた。エレベーターの中で、「でも、島岡さん、なぜ頭のCTスキャンをやるんですか？」

「あ、そんなこともドクターから説明を受けていないの？ほら、顔と性格が悪いことはドクターの間で評判でしょう？だから頭も悪いことになると、ドクターは3拍子そろって納得するわけですよ。これはドクターの安心のためにやるのです。内緒の話です」  
「おまけに、島岡さんはハートも悪い」  
「おい！」